
見て、みて、ミテ。

ねぐろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見て、みて、ミテ。

【Nコード】

N6773K

【作者名】

ねぐろ

【あらすじ】

主人公の安西恋華^{あんさいれんか}は、高校受験にみごとに落ちたばかりの中卒生。ギャルで金髪、ピアス、派手な格好が取り柄な恋華。

恋華はあるひ家出を決意、親に死ねと言って家を後にするが、行く所などなく、寝る場所確保のために仕方なく元彼の住むマンションへ。だがドアの向こうから出て来たのはホストみたいな顔立ち、金髪でピアスをした知らない男が出てくる。そして無理矢理部屋に入らされキスをされてしまった。

そのなれなれしい態度にムカついた恋華は、マンションを出て渋谷

を歩く。

そこで見知らぬおやじに声をかけられ、ほいほいといつて行つてしまつた恋華に、最悪な事態が・・・・！！・・・みたいな？笑

家出。(前書き)

この小説は、キスやあっち系がちらほぐら・・・)(ニヤリ
苦手な方はご遠慮ください。

家出。

昔からそう。

私を見てくれる大人なんかいなかった。

お父さんもお母さんも自分の事ばかりで、

私を見てくれないんだ。

だから、大きくなったら、見てもらおう。

・・・自由なわたしを。

「待ちなさい！！！！恋華！！！！」

「誰が待つかよ！死ねよッ！！」

安西恋華、15歳、三月下旬、午後7時。

私はたくさん荷物を持って家を出た。

大嫌いなお母さんの声を最後にして。

受験にみごとに落ちた私は、大嫌いな家をやっと出る事が出来た。

未練なんてない。

ずっと望んでた事だから。

「これで・・・自由になれる・・・！」

思わず感激の言葉が口から溢れ出す。

嬉しい。

私の親は馬鹿みたいに厳しくて、自己中で、これ以上いられるよう

な環境ではなかった。

小さい頃から死にたいって思ってた。

お父さんは口より手が先に出る性格で、死ぬほど殴られてきた。

お母さんは教育熱心で、派手なファッション禁止、化粧は二十歳まで禁止、とにかく厳しい女。

でも誰だってこんな無茶苦茶な家庭でまともな子に育つわけないっしょ。

金髪ロング、化粧、ネイル、ピアス、舌ピア、カラコン。

これが今の安西恋華15歳、私。

人気雑誌、『egg』を見て、初めてギャルの存在を知った。

そして、懂れた。

可愛い！！！！誰やこの可愛い子！！！！？？

最初に目に飛び込んで来たのはショートでツートーンのボーイッシュな女の人。

そして個性的で目立つ格好をしている美人な女の人。

この二人みたいになりたいって思った。

初めて髪を染めて、穴あけて、化粧をして。

親にどれだけ怒られたことか・・・笑えてくる。

学校でも人一倍目立って、担任には会ったび呼び出されて

「・・・ツと」

過去を思い出しながら歩き回ってある場所にたどり着いた。

This is 元彼のhouse。

一週間ばかり前に別れたばかりの元彼のマンション。

今はコイツに頼るしかない・・・うん。

でもうちからフットんだよね・汗

でも、今は・・・いや、今日だけでもっ！！！！

「うあ~~~~どおしよ~~~~」

「なあアンタ、さつきから人ん家の前でうつさいんだけど」

「！！？」

「ってあれ〜？すげえ可愛い〜うけるしッ」

「・・・ど、ども・・・」

「ってどーもぢやねええええッッ！！！！元彼の家ちゃうやんけッ！！！！！！」

誰このホスト面の男ッッ！！！！？？？

「あ、あの〜・・・ここにいつ頃からお住まいで・・・？」

なぜにうち久しぶりの敬語？・・・んなことどーでもええわ。

「なんで？」

「いや・・・つい最近まで知り合いがここに住んでたからその・・・」

「今日からだけど」

「へ？」

「だから、今日越してきたばっかだって」

「馬路で・・・？」

「馬路♪」

初対面にもかかわらず目のくらむ微笑で返事をする彼。

綺麗にセットされた綺麗な金髪の髪、そのそばで揺れる長めのピアス。

整った顔、着崩した黒いスーツ。

なんか・・・ホストの匂いぶんぶんする・・・コイツ。

私が考えこんでいると彼は口を開いた。

「何歳なの？・・・高2くらい？」

「・・・15ですけどッ！」

そんなに老けてねえよ失礼な！！！！キレそうになったよ、おい。

「嘘ッ！？中3！？高1！？」

「・・・受験落ちたばっか」

「なるへそ」

ニヤリと微笑んだ彼はそのまま続けた。

「俺とおそろいの道進んでんじゃん」

「・・・お、おそろい・・・？」

何言ってるのこの人・・・絶対おかしい。

「で、何でこんな時間にここにいるわけ？」

「家、出て来たの。受験も落ちたし、自立しようと思って・・・」

「とりあえず行くとこないから元彼ん家に居候しようと思った、とか？」

「ツツ・・・！！！」

「凶星？」

「・・・もういいッ」

「ん？」

「お世話になりましたッ！！！！ぢやあねッ男！！！！」

なんなのアイツ・・・！？ちょっとルックスいいからって調子のんなボケがッ！！！！

あんな事普通言えないでしょ！！！！あゝもゝ死ね！！！！

ここには二度とこないと決心しながら？？ヒールを早く操りながらエレベーターに向かう。

「ドンキにでも今日は居てやるッ・・・」

エレベーターが来るのを待ちながら香水を取り出して手首にかけようとキャップを取り外す。

するとキャップは誰かの手に渡った。

「ッ！！？」

バツと振り返ると、そこにはあのホスト野郎。

「何処行くわけ？」

「あんたに関係ないでしょ・・・」

ホスト野郎は私を壁に押し付け顔を近づける。

「関係あるよ」

「なっ・・・なにつ」

次の一言に私は言葉を失った。

「居候させてやんよ」

彼はニヤリと唇をよがませた。

続く・・・

家出。(後書き)

・・・どどどどどっでしようかつ!!!?????

初の恋愛小説です。

ちなみに自慢ぢやないですが、恋愛小説わ一冊も持ってません・笑
ほんとに女か、みたいなね・笑

この小説に目を向けてくれた方に心から感謝します
ありがとうございました！

大人の魅力？（前書き）

居候させてやると言い張るホスト野郎「須崎 蓮夜」（すぎき んや）は、

遊びのような顔でサラッと恋華に笑顔を向ける。

だがその笑顔の裏にはやっぱり何かありそうだと疑う恋華に彼がとつた行動は・・・

・！？・・・的な？笑

大人の魅力？

「居候させてやんよ」

彼はニヤリと唇をよがませた。

「はい・・・？」

「だから、俺ん家来いよって話」

な ん で す と ！ ！ ？ ？

やっと彼の言葉の意味を理解した私は、驚きを隠せないでいた。

「なんで見た事も会った事もない初対面の女に居候誘ってんの？！」

「可哀そうだから」

「可哀そうぢやないしっ！失礼な！」

「じゃあ、何処で寝んの？」

「そんなの、あたしの勝手だからっ」

知らない男の家で居候なんてありえないっしょ・・・、コイツ脳ナシ
！？馬鹿？！

自分の中で考えがまとまらなくてごちゃごちゃする。
意味分かんない。

「なあ・・・」

ふとホスト野郎が私を呼んだ。

「つ、次は何っ・・・？」

「名前、教えろよ」

「何で？」

「一緒の家の中に住むってのに、名前も知らねえとかねえだろ」

「誰もあんたと住むなんてっ」

「俺、須崎 蓮夜」

「すぎき れんや」これがホスト野郎の名前らしい。
仕方なく私も名前を教えた。

「・・・安西、恋華」

「れんって所一緒だなっ」

「多分漢字違うと思うよ・・・」

この蓮夜って人・・・ますます分かんないんだけど・汗
ってか相手こつちがもう居候するみたいに認識してるし！！！！

「まあ、いったん上がれよ。恋華ちゃん」

蓮夜って人は自分の家のドアを指さしている。

とても引き返せる状況ではないみたいだ。

「じゃあ・・・ちよつと、ね」

なぜか変な脱力を抱えて私は彼の家へと入った。

「・・・お邪魔します・・・」

「どーぞ、引っ越してきたばっかだから、ダンボールばっかだけど」
彼の言ったとおり、部屋はたくさんのダンボールで埋め尽くされて
いた。

「引っ越しは初めてなの？」

なんとなく浮かんだ疑問を聞いてみる。

「そう、初引っ越し。おかげでどっから手えつけばいいか分かん
ねえ」

困り笑顔を見せる彼の表情はどこか新鮮だ。

その笑顔に影響されてか、思ってもない事を口に出してしまった。

「手伝おつか・・・？」

「馬路？いいの？」

「別に・・・嫌ならいいけど」

「嬉しい事言ってくれんじゃん。サンキュ、恋華」

あ・・・やばい、今あたし絶対顔赤い・・・。

呼び捨てされただけなのに・・・あたしの馬鹿馬鹿馬鹿あ~~~~っ
っ！！！！

「と、とにかく！あたしはキッチンとリビングの方やるからっ・・・」
顔を隠すようにして作業に向かった。

そうでもないと思われる、絶対。

今まで5人くらいの男と付き合っただけで別れてきた。

だけど、それは全部同年か一個上くらいで、なんていうか・・・

大人の色気・・・???のある、ない、みたいな。

元彼の笑顔は、まだ幼げというか・・・青春！みたいな感じだけど、
あの蓮夜って人の笑顔は、元彼どもと全く違う・・・大人っぽい、色
気のある笑顔。

15歳、中3の私には大きな違いだった。

「・・・にしても、なんて荷物量の量なの・・・」

キッチンがだいぶ片付いてしまっているというのに、ダンボールの
数が一向に減らない。

ていうか何でこんな事しなきゃなんないの・・・って、自分で言っ
たんだよ、馬鹿。

急いでリビングの整理に取り掛かる。

早くこんな家出て行かなきゃ。

「っ、重っ・・・何入ってんの一体っ・・・」

「大丈夫か？馬路すまねえな、いきなり力仕事させちまって・・・」
ほかの部屋から彼が手伝いに来てくれた。

重い荷物を軽々と持ち上げる。

それでもっていきなり近づく顔。

おそらく7センチくらいの距離。

「なっ・・・な、につ」

「恋華ってやっぱすげえ美人」

「はっ！？何いきなり馬鹿な事言って・・・っ!？」

彼と私の顔の距離が7センチからもっと近づいて、

近づいて

ちかづいて

チカツイテ。

ゼロになった。

つづく・・・

大人の魅力？（後書き）

どーでしたっ！？どうでしたかっ！！？

蓮夜みたいな大胆行動は萌えますね（（蹴

感想、アドバイス！厳しい発言としどし書いてください！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6773k/>

見て、みて、ミテ。

2010年10月11日17時13分発行